

海外移住 資料館だより

Japanese Overseas
Migration Museum News

No. 63

2025 | February

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移民の歴史と、日系コミュニティについて広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel:045-663-3257(代)
URL: <https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html>
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 大野 裕枝

企画展示

サンノゼ・ジャパントウン 受け継がれる移民の想いと心 2025.2.14(Fri) - 6.29(Sun)



企画展示

San Jose

サンノゼ・ジャパントウン

受け継がれる移民の想いと心

2025.2.14 (Fri) - 6.29 (Sun)

第二次世界大戦以前のアメリカには、「日本町」と呼ばれる町がカリフォルニア州だけで46カ所ありました。現在は、ロサンゼルス、サンフランシスコ、サンノゼの3市に残るのみとなっていますが、中でも移民文化の面影や遺産が一番色濃く感じられる町がサンノゼです。企画展示では、サンノゼ日本町(ジャパントウン)の歴史を辿り、そこで生活する人々や日系の団体・店舗などの活動から、移民が残した文化遺産がどのような形で受け継がれ、今日に至っているかを紹介しています。

ニューヨーク

サンフランシスコ

San Jose

ロサンゼルス

ワシントンDC

サンフランシスコ湾

シリコンバレー

San Jose

サンノゼ日本町の誕生

サンノゼは、半導体やソフトウェア等のスタートアップ企業が集まることで有名な米国カリフォルニア州シリコンバレー地域に位置する都市です。周辺のサンタクララ平原は、野菜や果物、ナッツ類を生産する農業地帯として知られ、1890年代に農園で働く労働者としてやってきた単身の日本人男性たちが、この地の日本人移民のはじまりだと言われています。

町の中心を通るジャクソン・ストリート(ジャクソン街)と、それを横切る5thストリート(第五街)、6thストリート(第六街)などにはもともと中国人が多く住み、中華街が形成されていました。そこに日本人移民が集まることで、サンノゼ日本町は発展していきました。当初は単身の農業従事者ばかりでしたが、1900年代になると写真結婚※で日本人女性がやってくるようになり、二世が誕生。それに伴い、食料品や家庭用品を取り扱う日系の商店が立ち並びようになり、日本人会や県人会、日系の病院などができました。

※写真結婚：写真と履歴書の交換、手紙のやりとりだけで男性と入籍し、妻として海を渡る結婚。妻は写真花嫁(Picture Bride)と呼ばれた



1906年にジャクソン街で創業した北米商会★

1910年に建てられたBathhouse(銭湯)
多くの人々が自宅にお風呂を持っていなかったため、銭湯は日本町の人気スポットだった★

空白の数年間でゴースト・タウンに

徐々に発展していったサンノゼ日本町でしたが、1941年に第二次世界大戦をはじめと、状況が一変します。42年に当時のF.ローズベルト大統領が、米西海岸に住む日本人とその家族を強制的に退去させる。大統領令9066号に署名したことにより、全米で約12万人が強制収容の対象となったのです。サンノゼの日系人も例外ではなく、市民権を持つ二世三世までが収容所生活を余儀なくされました。

数年間におよぶ強制収容により住民を失ったサンノゼ日本町は、ゴースト・タウンのように廃れてしまいました。現地で発行されていた邦字新聞「日米時事(Nichi Bei Times)」(2009年9月廃刊)が、1990年9月にサンノゼ日本町の100周年を記念して発行した特集紙面には、同紙サンノゼ支社の支社長だった故・峯田国作氏の述懐として「1945年のサンノゼ日本町は幽霊町そのもので、元の日本町に立ち返られるかどうかと長嘆息した」と書かれています。



強制立ち退き令により、収容所へ移動する列車に乗り込む人々★



1987年には、町のシンボルとして蓮の花をイメージしたロゴマークが採用された★



日米物産サンノゼ店の出店50周年を祝って撮影された龍野家の家族写真(1998年撮影)★

戦後の再定住と日本町の復活

戦後、収容所から戻ったものの住む家を失った人々の多くは、サンノゼ仏教会別院(浄土真宗本願寺派サンノゼ別院)やメソジスト教会が地下や体育館などを利用して運営するホテルで暮らし、ゼロからの再スタートを切りました。

戦後の再定住は順調に進みました。戦前に53軒あった日本人商店も、1946年時点ですでに40軒に戻り、約100家族がジャクソン街周辺に居住するようになりました。戦争を機にアメリカでの永住を決断する人が増え、1950年代から60年代にかけては、サンノゼ日本町が最も活気ついた時期でした。その後、一世が高齢化していくと、二世が商店などの跡を継ぎました。

1970年代に入ると、若い世代はアメリカ文化に溶け込んで暮らすようになり、サンノゼ日本町は徐々にその役割を終え衰退していきます。しかし、時を同じくして三世が政治活動に参加するようになると、日系としての文化意識が高まり、日本町を再生しようという動きが生まれました。高齢者福祉団体の「友愛会」が設立され、76年にはサンノゼ仏教会がスポンサーとなって140戸からなる6階建ての高齢者用アパート「藤タワーズ」が完成。80年代になると、住民たちによる日本町の再建設はさらに本格化していきました。



藤タワーズは、サンノゼ仏教会別院の創立70周年を記念して建設された。名称は浄土真宗本願寺派の紋である下がり藤に由来する★

小さなコミュニティならではの結束力

戦後、カリフォルニアにあった多くの日本町が消失していくなかで、生き残ったのがサンフランシスコ日本町と、ロサンゼルス、シリコンバレー、そしてサンノゼ日本町でした。サンフランシスコとロサンゼルスが、外部の資本を取り込んだ大規模な再開発によって再生したのに対し、サンノゼ日本町の再建は、そこに暮らす住人と、家族経営によるスモールビジネスを担う人々が中心となって進められました。比較的小規模な日本町であったことが、逆にコミュニティのまとまりと結束を生み出した結果だったと言われています。

サンノゼ日本町は今もなお、日本移民の歴史と文化的遺産を大切に守り、語り継ぐ場所として存在し続けているのです。



1987年に設立されたサンノゼ日系アメリカ人博物館。2010年10月にリニューアルし、教育プログラムなどを通じて日本移民の歴史を伝えていく



1946年から三代にわたり続いたサンノゼ豆腐店。2017年に惜しまれながら閉店した

★出典: "San Jose Japantown: A journey" Curt Fukuda & Ralph M. Pearce(2014)

サンノゼ日本町の人々

A Santo Market

山藤マーケット(食料品店)



1946年にジャクソン街で創業し、57年に現在の場所に移転。アジアの食材を専門に、生鮮食品も扱う店です。コーヒーやエスプレッソの他、ボキ丼、いちご餅、豚まんなど、オリジナル料理も販売しています。現在のオーナーは三代目のマークさん。大叔父が戦後に始めた店をマークさんの父親が引き継ぎ、マークさん自身も高校時代から店で働きました。ベストセラーのいちご餅は、両親がハワイ旅行でいちご大福を食べたことがきっかけで始めました。現在はテイクアウトのお弁当を販売しています。

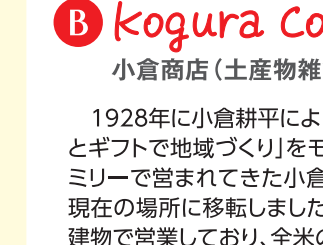
日本町は本物のコミュニティ。永遠に続くものなどないことは分かっているけれど、両親がここで築いてきたものを遺産として残すために、店を続けていきたいです

マーク・サントウさん



B Kogura Company

小倉商店(土産物雑貨店)



1928年に小倉耕平により創業され、「家電とギフトで地域づくり」をモットーに小倉ファミリーで営まれてきた小倉商店。1934年に現在の場所に移転しましたが、戦前から同じ建物で営業しており、全米の日系商店の中でも最古の店舗であると言えます。現在は、日本人形や、陶器、風鈴、折り紙などのギフト商品の他、日本料理などに関する書籍など、日本文化に関連した商品を販売しています。サンノゼ日本町の歴史や景観とその精神を守り続ける、過去と現在が融合したお店です。



ここから数ブロックのところで生まれ育った私にとって、日本町は我が家であり、私のコミュニティそのものです

リチャード・コグラさん

C Shuei-Do Manju Shop

集栄堂和菓子店



1953年創業。昔ながらの駄菓子屋のような小さな店構えの「集栄堂和菓子店」は、毎日1,000個近くの餅や和菓子を販売しています。ガラスケースの中には、丸いお餅や最中、パステルカラーのチチ団子などが漆のトレイに並べられています。

1987年にこの店の経営権を譲り受けたトムとジュディ・クマール夫妻は、初代店主のジョン・オザワから饅頭作りの技術を学び、以来37年間毎日餅をつき、饅頭を作り続けています。



サンノゼに饅頭屋があることを喜んでくれるお客さんがいる。それが何よりの喜びで、だから続けていけるのです

トム & ジュディ・クマールさん(中央)

D Nichi Bei Bussan

日米物産商会(土産物雑貨店)



1902年にサンフランシスコで創業した日米物産は、日本の手工芸品、武道用品、布地、ふとん販売のほか、新古品の委託販売を行っています。多くの「写真花嫁」が日本からやってきた時代、和装の花嫁たちは、船から降りると日米物産にやってきて、コルセットやハイボタンの靴、ダチオウの羽で縁取られた大きな帽子など、アメリカンな服を購入してさっ

そうと町へ繰り出して行ったそう。

強制収容で一時間閉店を余儀なくされた日米物産ですが、戦後46年にサンフランシスコに再オープン。創業者の龍野正二郎が引退すると、息子のディップさんが後を継ぎました。彼が48年にサンノゼにオープンした2号店では伝統的な和雑貨を扱うことに専念し、日米物産の伝統とプライドを引き継いでいます。

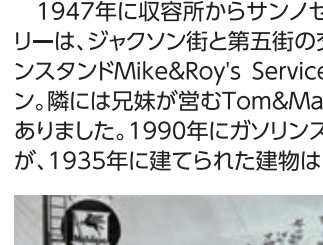
私たちの店は、日本町のいわば非公式ミュージアムみたいなものです。本来のミュージアムは木曜～日曜の12:00から16:00まで開館していますが、よそから来る人はそんなことを知らずに来る。でも、うちがオープンしていればここで歴史を知ることができるでしょう?

アーリーン・タツノ・ダムロンさん



E Roy's Station Coffee and Tea

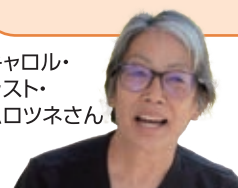
ロイズ・ステーション コーヒー&ティー



1947年に収容所からサンノゼに戻った室常ファミリーは、ジャクソン街と第五街の交差点の角に、ガソリンスタンドMike&Roy's Service Stationをオープン。隣には兄妹が営むTom&Mary's Snack Shopがありました。1990年にガソリンスタンドは閉店しますが、1935年に建てられた建物は、しばらく倉庫として使われていました。家族の思い出が詰まった建物を、2009年に娘のキャロルさんがカフェとして改装して営業しています。

私たちは、どこの町にでもあのような商業主義を望んでいません。サンノゼ日本町がこれからもユニークで唯一無二の場所であり続けることを願っています

キャロル・ラスト・ムロツネさん



サンノゼの "OBON Festival"



毎年7月に2日間にわたって開催されるサンノゼの「OBON Festival」は、戦前から続くサンノゼ日本町最大の伝統行事です。1920年代にコミュニティの中で散発的にはじまった盆踊りが、20年代後半になるとサンノゼ仏教会別院が中心となって開催する恒例行事になりました。タイコや生バンドによる演奏のほか、屋台のゲーム、日本の食べ物味わえるフードコートなどがあり、駐車場と会場間を無料のシャトルバスが運行するほどの賑わいです。

元々は、一世が故郷を偲んではじめた盆踊りでしたが、アメリカ文化の中で育つ二世の時代になると、盆踊りと西洋式のカーニバルの要素をミックスすることで独自のスタイルが生まれました。若者が好む曲を取り入れたり、浴衣に代わって華やかな着物姿で踊ってみたり。日本町の外からもたくさんの方が訪れる大規模な集客イベントに成長した一方で、盆踊りの本来持つ宗教的な意味合いが忘れられようとしていた時期もあったといいます。

伝統文化の継承と新しい取り組みとをバランスよく取り入れながら、サンノゼのOBON Festivalは、現在も地域の名物イベントとして親しまれています。第五街に組まれた大きなやぐらを中心に、人種や宗教、国籍や世代を問わず、大勢の人々が盆踊りを楽しむ様子は圧巻です。



世代や人種を超えて
たくさんの方が訪れる



サンノゼ仏教会別院の開教使 ジェラルド・サカモトさん

祭りの規模は昔と比べるとかなり大きくなりました。昔は踊り手が700人くらい集まれば良い方だと思っていましたが、ここ数年は、来場者が増えています。OBON Festivalは仏教に基づいたお祭りなので、家族や友人が集まって、亡くなった人たちが今も自分たちの生活の一部であることを思い出す機会になればと思っています。今後、祭りは形を変えていくでしょうが、亡くなった人との関係を考えるという根本的な部分は、変わらないものだと思います。



JICA海外移住「論文」および「エッセイ・評論」授賞式を開催しました!



左より、受賞した大島さん、小迫さんと大野館長
(長沼さんはご都合により欠席)

2024年12月18日(水)、当館にて、第五回 JICA海外移住「論文」および「エッセイ・評論」の授賞式を行い、大野裕枝館長より受賞者の方々に賞状と賞金が授与されました。受賞作品は以下の通り(「論文」部門は受賞者なし)。
ぜひ、当館HPからお読みください。

「エッセイ・評論」部門 最優秀賞

- 大島正裕さん「ボリビア・リベラルタとともに生きた日本人ー下瀬甚吉ー」

「エッセイ・評論」部門 優秀賞

- 長沼彩花さん
「日本人移民が向き合う孤独と母語教育・同胞コミュニティの重要性ー1950年代の北米報知の記事を起点にー」
- 小迫孝乃さん「ハワイ移民和助の生涯」

募集中

現在、第六回JICA海外移住「論文」および「エッセイ・評論」の作品を募集中!「日本人の北米・中南米への移住」をテーマにした研究結果やエッセイ・評論のご応募をお待ちしています。2025年6月30日(月)必着。「論文」部門最優秀賞には50万円、「エッセイ・評論」部門最優秀賞には20万円の賞金・研究奨励金が贈られます。詳細については資料館HPをご覧ください。



第六回
募集要項は
こちら

公開講座 のお知らせ

「日本町の重要性」

2025年3月22日(土) 14:00-15:30



- 会場: JICA横浜1階 会議室1
- 入場無料 予約不要
- 講師: マイケル・M・セラ氏

(サンノゼ日系アメリカ人博物館 前館長)

使用言語
日本語

現在開催中の企画展示「サンノゼ・ジャパントウン 受け継がれる移民の想いと心」に関連した公開講座を開催します。講師には、サンノゼ日系アメリカ人博物館でバイリンガルの解説員として日系アメリカ人の歴史と経験を広める活動に従事後、理事、館長を歴任したマイケル・M・セラさんをお迎えします。マイケルさんが今まで関わってこられた経験を踏まえ、サンノゼ日本町とその歴史をご紹介しますので、ぜひ奮ってご参加ください。



サンノゼ日系アメリカ人博物館 外観

次回企画展示予告

破られた約束

ー太平洋戦争下の日系カナダ人ー

2025年
8月15日(金)
～12月7日(日)



海外移住資料館 周辺マップ



みなとみらい線	「馬車道」駅(4番出口)から徒歩約8分 「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から徒歩約15分
JR線・市営地下鉄	「桜木町」駅から徒歩約15分 (汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)
バス「あいくつ」号	「ハンマーヘッド」から徒歩約2分

- 開館時間 10:00～18:00(入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)
- 入館料 無料

日系人と日本の歌

–Nuestra historia con la música japonesa /
Nossa história com a música japonesa

南米の日系コミュニティではどんな日本の歌が流行っているのでしょうか。若い世代の日系人がご紹介します!

- 開催日 — 2025年3月10日(月) 18:00-19:30
- 使用言語 — 日本語
- 事前登録制 — Zoom開催 定員500名



お申込はこちら



独立行政法人国際協力機構 横浜センター
海外移住資料館

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2丁目3番1号
TEL.045-663-3257 FAX.045-211-1781

<https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html>

Eメール
jicayic_jomm_info@jica.go.jp

